

JAC AWARD 2025 私が選ぶベスト3



井村光明

チャイム クリエイティブディレクター / CMプランナー

1968年広島県出身。東京大学農学部卒。1991年より博報堂にてCMプランナーとして勤務。
2025年独立し個人事務所チャイムを設立。

日本コカ・コーラ「ファンタ」、永谷園「Jリーグカレー」、MTI「ルナルナ」、福島県庁「ふくしまプライド」、
UHA味覚糖「さけるグミ」、新生フィナンシャル「レイク」、グーグル「クロームブック」等を担当。

ACCグランプリ、TCCグランプリ、ADC賞、カンヌシルバー等受賞。

2020年ダイヤモンド社より「面白ってなんなんすか問題」を上梓。

ディレクター部門

★First place

▶ 「ちょっとだけ未来の話」 井田 芙和（デジタルエッグ）

なによりも全ての作品の中で主人公が一番魅力的だったことを挙げたいです。

AIをテーマにすると人間性と対比させて難しく考えがちですが、なんだかんだ言ってもう多くの人がAIを使っているのだからポジティブに考えてもいいのではと思っていました。仲良く共存するという視点に立てば、主人公のキャラをこんなにもイキイキと描けるわけです。演出だけでなくストーリーもタイトルも良かった。「ちょっとだけ未来」になれば難しく考えなくてもいいんだ、という僕の見たい未来でした。

★Second place

▶ 「考える人」 那須川 剛（ピラミッドフィルム）

言われてみればスマホを見る人は考える人と似ているな！ シンプルですが僕には強いインパクトがありました。

考えてるように見えて何も考えてない人が目の前にいると想像すると、昆虫のように思えてきて生理的に怖かったです。

とにかく考える人にスマホを持たせただけでAIの時代を象徴できていることが凄い。

タイトルは「考えなくなった人」でもよかったかもしれません。誰もが本物の横にこの像が並んでいる様子をイメージしてしまった作品ではないでしょうか。

★Third place

▶ 「感動の理由」 岡 嶺央（太陽企画）

人間の曖昧な価値観をあるあるネタ風に軽く描いていますが、なかなか深いテーマに感じました。

私たちは人間らしさをAIに対する絶対的な砦のように考えているけれど、思えば価値観だけでなく、人間らしさ、という言葉自体の意味や価値も曖昧なことに気付かされるわけです。

また、AIが特に何もしないのも良かった。客観的に人間を見るだけの存在として描いた視点は他にはないもので、AIをめぐって勝手に人間が騒いでいる現在の象徴のようにも見えました。

ラストでAIは丁寧に「わかりません」と言ってくれていますが、そのうち「お前ら何言ってるか全然わかんねーよ！」とキレられるのでしょうか。

ディレクター個人応募部門

★First place

▶ 「人間セミナー」 柳田 淳之介（博報堂プロダクツ）

とにかく設定の面白さを前半のセリフ「違う違う違う、だから早い！」で凝縮できていたことに尽きます。

AIをボケに見せる見事なツッコミで最後の「ズコーツ」まで一気に見せられました。

一方でAIと人間のコンビ漫才という印象が強く、メッセージ性は薄く見えたかもしれません。が、30秒はそれもアリなんじゃないでしょうか。

2位の作品にも通じるのですが、起承転結の起だけで突っ走れる30秒ならではの魅力が出ていたように感じました。

★Second place

▶ 「ようこそリアルへ」 榎原 遼太郎（TYO）

vs人間で語られがちなAIをvs死と設定している。AIが肉体を持ったらという視点がとても新鮮で、もっと長尺で見たくもなりました。

しかし結論づけられないテーマを問題提起だけで逃げ切れたり、答えがなくても納得できるのも30秒という尺の面白さなのでしょう。

主人公が走り去るだけで終わるのはその象徴のようにも見えて、JAC AWARDの意義を感じさせられる作品でした。

★Third place

▶ 「フンばってからがものづくり」 尾関 彩羽（ピラミッドフィルム）

やはりプルンと揺れるフンの質感でしょうか（笑）。リアルとかわいさの絶妙な着地にかなりのこだわりが伝わってきました。

茶化しているわけではなくて、この、こだわりがちゃんと伝わることに価値があると思うんです。

AIをテーマにすると人間らしさを強調しがちですが、手作りならなんでも価値があるというのは建前っばいですね。

ストーリー上の意味よりも、人間のこだわりを表現するモチーフとしてフンが有効だった。そう僕には見えました。